A classmate is a princess knight!
姫騎士がクラスメート!
2
【小説】EKZ
【イラスト】吉沢メガネ
試し読み版

【小説】EKZ STORY WORKS BY EKZ

地方都市在住の兼業作家。趣味はアナログゲーム全般。最近ボードゲーム布教に熱心だが薦めた相手に自分がなかなか勝てない。好きなエルフはピロテースとラゼィル。好きな魔族はシェリスエルネスとメルセデス。

【イラスト】吉沢メガネ ILLUST WORKS BY YOSHIZAWA MEGANE

はじめまして、吉沢です。最近猫飼い始めました。元々犬派だったんですけど知人が拾った子をもらって一緒に暮らしてます。めっちゃ噛まれるし、絵を描く邪魔ばっかされるけどなんとか仲良くやってます。早く大きくなれ!

A classmate is a princess knight! - volume.2

Contents

第二章　俺と、魔貴族と、破天の骸

★1話★ 二人の訪問者と、王都の女騎士 8
★2話★ 主従の奉仕と、それぞれのルーツ 18
★3話★ シエラの過去と、森の異変 33
★4話★ 囚われの術師と、神殿の再会 45
★5話★ みっつの思惑と、追う影ひとつ 54
★6話★ 支配の遊戯と、反逆の挑戦 65
★7話★ 呪われし巫女と、骸の正体 85
★8話★ 狂える公女と、樹海に墜つもの 100
★9話★ 選ぶべき道と、逆転の秘策 159
★10話★ 敗北の記憶と、それぞれの戦い 170
★11話★ 狂公女の戸惑いと、不穏の影 187
★12話★ 幼魔二人と、勝負の行方 203
★13話★ 集う力と、秘策の発動 217
★14話★ 魔腕の奇跡と、彼女たちの動揺 237
★15話★ 姉妹の淫戯と、非情なる絆 252
★16話★ 温泉の秘め事と、復讐の騎士 266
★17話★ 異界の兵器と、あの言葉 286
★18話★ とろける体と、揺れる世界 302
★19話★ 空裂く力と、断ち切られる縛鎖 319
★EX-Hシーン★ キリカと、姫と、水着と 117
★ボーナストラック★ 俺と、キリカと、ちっちゃなキリカ 334

1話：二人の訪問者と、王都の女騎士

「……いったい何者なのです、あなたは？」

二人がけのソファーに腰を下ろした俺へと、ちりちりした不審の視線が注がれている。

豪華な調度品が散りばめられた、広く天井の高い応接間。

「……」

眼前の人物は、この館のあるじ、ユーリナ女伯爵。

まだ二十代になったばかりの若さだが、緑を基調とした華美で威圧的なドレスと、美人だが性格のキツそうな視線が、近寄りがたい雰囲気を彼女に与えている。

「黙らず、答えなさい。なにゆえ私の館に忍び込み、ものを盗るでも何をするでもなくただ座っていたのかしら？」

庶民的な布の旅装をした俺の手も足も、魔力持つ文字の書かれた帯……動きを封じる枷によって自由を奪われている。

加えて、部屋の入り口に直立不動で控えている壮年の執事が、俺の動きに油断なく目を光らせていた。

彼女の護衛も兼ねているようで、もし魔法を詠唱するそぶりなど見せようものなら、即座に対処されるだろう。

「あなたが、ちょうどいいと思ったからですよ」
ようやく口を開いた俺に、うら若い女伯爵は細い眉をかすかにあげて不思議そうに聞き返す。
「ちょうどいい？　それはどういう意味かしら？」
「領地の場所と館の立地条件、王家の遠縁という立場の強さ、独り身……そして人嫌いで、酔狂な遊びを好む自分勝手な性格。特に最後のがちょうどいい」
「ぶ、無礼な！　何をわけのわからぬことを！」
手に持った扇を振り上げ、俺を打ち据えようとするユーリナ。
噂以上に子供っぽい性格だ。政治的な理由で、王都を遠く離れシェイヨル大森林に面した、この辺境の田舎を領地として割り当てられた境遇のせいだろうか。
「気に入った若いメイドを寝室に連れ込んでの悪戯が唯一の憂さ晴らしだって、領内じゃもっぱらの噂ですよ。縁談も断ってばかりで、ひょっとして男相手が怖いんですか？」
「だ、黙りなさい！　この、どこの馬の骨とも知れぬ下郎が、私を誰だと……！」
振り下ろされた扇が……俺の顔の前でぴたりと停止した。
その瞳の周囲に、緑の光がかすかに明滅していることは、後ろの執事からは見えないだろう。そしてその彼に、ユーリナは向き直った。
「……お前、下がりなさい」
「は？　しかし……」
「下がりなさい、と言いました。この男と少し、私だけで話します。何かあれば呼びますので」

「は……」
おそらく主人の酔狂には慣れているのだろうし、ひ弱そうな俺に危険性も感じなかったからか、執事は不思議がりながらも一礼して退出する。
すぐさまユーリナ女伯爵は、俺の手足を封じる魔力帯に手をかざして解除のコマンドワードを唱え、俺を解き放った。
「ふう、ありがとう。じゃあ、これからする言いつけを……そうだな、俺のチンポでもしゃぶりながら聞いてくれ」
「はい、ご主人様。初めてで上手くできるかわかりませんが、精一杯に務めさせていただきます」
隷属魔法によって支配下に置かれた彼女は、躊躇なく俺の股間にひざまずいて、高級そうなルージュで半勃ちのペニスへと口付けた。
システィナ姫がかどわかされたという噂は聞いていても、まさかこの辺境に現れた俺みたいな年格好の奴が、犯人の魔隷術師（スレイヴマンサー）だとは夢にも思わなかっただろう。
「お前の領地の外れ……シェイヨル大森林まですぐの場所に、ほとんど使ってない別邸があるらしいな？　そこを、俺の新たな拠点にする」
「はい、ご主人様っ……んちゅ、ああっ……これ、すごい匂い、です……！」
「長旅が続いてたからね。あと、もうすぐ到着する馬車を迎え入れて、中にいる村娘たちは館に住まわせ面倒を見るように。お前のいつもの遊びに偽装して、な……ああ、だからって俺のものに手は出すなよ？」

「わかりました……れろ、ちゅぷっ……ちゅぽっ、んぷっ……んんぅっっ⁉」
ぎこちない初フェラをするお上品ぶった口の奥に、赤いルージュのこびりついたチンポを遠慮なく突っ込む。
やたらと時間をかけて整えられてそうな複雑な髪型の、ウェーブがかった薄茶色の頭を無遠慮に掴んで前後にくぽくぽ揺さぶるイラマチオしつけだ。
「あと出発までに、後で渡すリストに書かれたものを揃えさせといてくれ。すべて俺の存在含め他言無用、使用人にも箝口令を敷いとくように」
「んん――っっ‼　んぷぁっ、ふぁ、ふぁいぃぃっ……！」
「よしよし、いい子だ……ところでユーリナ、お前やっぱり処女か？」
ずるりとチンポを引き抜いて聞くと、けほけほと可愛くむせながら女伯爵は告白する。
「けほっ……はっ、ふぁいっ……しょ、処女ですっ、怖くてずっとそこは、使ってませんっ……！」
「よし、じゃあそれも出る前に貰っておこう。嬉しいか？」
「は、はいっ……！　ユーリナの初めて、どうか散らしてくださいませっ……！　あのっ……ご主人様、よろしければ、お名前を」
そういえば名乗ってなかったな、と……俺はさっきまでとは別人のように幸せそうなとろけた表情を、ぺちぺちとチンポで軽く叩きつつ告げてやった。
「トオルだ。魔隷術師トオル……お前の最初で最後のご主人様の名前だ、よく覚えておくんだぞ」

※　※　※

ランバディア王都。
女騎士セレスタは亜麻色のポニーテールをせわしなく揺らしながら、色気のない部屋着で自室の中をぐるぐると歩き回っていた。
貴族の邸宅でありながら華美な調度品のひとつもない部屋の隅では、家伝の鎧が白銀と赤のにぶい輝きを放っている。
「なぜ、なぜこの私に、追跡の命がくだらないのだ……！」
〝深紅の薔薇（クリムゾンローズ）〟とまで呼ばれたセレスタの実績と忠義を疑う者はいなかったが、〝ランバディアの至宝〟システィナ姫を守れなかった責任を問う声はさすがに皆無ではなく、あれから謹慎状態が続いていた。
「いったい他の誰がッ！　あの卑怯卑劣、悪の化身のごとき魔隷術師の手から姫さまを取り戻せるというのだ……こうしている間にも、姫さまは……ッ！」
その間に聞こえてきた報告によると、もぬけのからとなった天啓の塔では〝仮面の魔隷術師〟に殺害された（とセレスタが報告した）グルーム元大神官の遺体は見つからなかったそうだ。
そして現場から消えた王家の馬車二台が、それぞれ別の場所で発見され、乗っていたのは顔を隠した男に金で雇われたというごろつきどもで……つまり姫の追跡は現状、なんの成果もあがっていないのだ。
「もしや今ごろ、キリカのように奴の手で無理矢理その花を散らされ……くっ！　どうしてあのような姿に堕ちてしまったのだ、姫騎士ともあろう者が……な、情けないッ……！」

ドンッと壁に拳を打ち付け、切れ長の瞳を悔しさに染めて、ぎりっ……と歯噛みするセレスタ。
ライバルだった姫騎士キリカの、別人のような痴態はまだ記憶に新しかった。
「あの汚れひとつないシスティナ姫さまのお体が、あんな男の……あんな……モノ、にっ……！」
ベッドに頭からぼふっと突っ伏した自分の体に、かっと熱い血が駆け巡るのを感じる。
忘れもしない、あのトオルという鬼畜外道に与えられた、女として最大の屈辱。
それを思い返さない日はなかった……そして、思い返すたびに。
「ううっ、くッ……！　ま、まただ、私の体はっ……ど、どうしてしまったんだ……あ、ああっ⁉」
いつの間にか、もじもじとすり合わされた内股の間……あのゲスな男に散らされ、蹂躙された部分へと、今日も指が伸びる。
ちゅくっ……とはしたない水音が、いつものように指二本をあっさりと飲み込んだ。
「んぅぅっ……ひぁ、うあうぅぅっっ⁉　ああっ、くそぉっ……！　な、なんで私がこんなぁっ……！」
ずぶずぶと奥まで差し込んだ指を、あの男への、そして自分への怒りをこめてがむしゃらにかき回し快感をむさぼる。
だが、こんなものでは全然、あの男にしゃぶらされ、突っ込まれたモノには遠く及ばない……ふとそんな思考がちらつく。
「おのれ、魔隷術師トオルめぇ……！　わ、私のカラダを、奴が得体の知れない邪術で作り替えて

しまったんだ、きっとそうだッ……あぁぁっ、ひぃぃんはぁぁっっ⁉」
自分の術にかかって、すぐキリカのように堕ちるぞと……あの男、トオルは自分を犯しながらせせら笑った。
だからきっと、その術がまだ残っていて、自分の体をおかしくしているのだとセレスタは結論付けた。そうでもなければ、説明がつかなかった。
宮廷法術師は女騎士の体に今、活性化状態の魔力は感じられないと言っていたが、信じられたものではない。
「ゆ、許さないぃっ、絶対にぃぃ……！　トオル、トオルッ……私の初めてをあんな、獣のような恥ずかしい格好で乱暴に奪った最低のゲス男……ッ！　ひぐっ、はぁぁうぅぅあっっ⁉」
うつぶせのまま指をいっそう動かしながら、家伝の鎧を涙目でにらむ……あの時、とことんまで汚された誇りの象徴。
それを知られてしまうようで怖くて、戻ってから誰の手にも触れさせていない。
誇り……自分の誇りを取り戻す方法は、今やひとつしかない。
「トオル、魔隷術師トオル……ッ‼　わ、私が、女騎士セレスタが、姫さまとキリカを必ず取り戻しっ……そ、そしてお前をぉぉっ、あッあうぅぅっっっ‼⁉」
しなやかな体をのけぞらせ、ベッドの上でポニーテールを振り乱して、尻を高く突き上げるセレスタ。
その姿勢は、馬車の中であのにっくき男に純潔を散らされた時と同じポーズだった。

「お前を必ずっ、この手で、殺してやるッ……!!　ひぁっ、あっああっ……ひぐぅぅぅんんんっっっ!!?」
決意の言葉と同時に、ひときわ高い鳴き声と、秘所からぷしゅっ……と濡れた熱いしぶきが噴出した。
健康的に絞り上げられた、だが要所要所にメスの柔らかさを残す肢体が、ビクビクとオナニー絶頂にわななく。
「はぁ……はぁぁっ……ま、またやって、しまったぁ……！　ううっ、最近いつもこうだッ……！」
誰にも言えない一人遊びの回数も、激しさも増すばかり。
自分の体が自分のものでなくなってしまうような恐怖に、女騎士は怯えつつも衝動に逆らえたためしがなかった。
「……お嬢様、お部屋においでですか？」
だしぬけに聞こえたメイド長の声と控えめなノックの音に、セレスタは心臓が口から飛び出るほど驚いた。
「なっ、なんだッ!?　ま、待て、開けずに用件を言えっっ!!」
「は、はい……その、奇妙な客人が、システィナ姫さまのことでお嬢様のお耳に入れたいことがあると……」
「妙な客人、だと？」
「それが……なんと言いますか、仮面で顔を隠しているせいで年格好も定かでなく、身元も不明で

す。追い返しましょうか？」
仮面……！　その単語に、セレスタははじかれるようにベッドから立ち上がった。
「待て！　会う、私が会う！　いいか、そいつを絶対に帰すなッ！」

※　※　※

「クルス、と申します。以後お見知り置きを」
人払いをした中庭で出迎えたその男（？）は、よもやまさか……という予想とは違い、鏡のように磨き上げられた銀の仮面で顔全体を覆っていた。
声はくぐもっていたが、白いローブ姿の背格好ともども少し違うようだ、記憶の中魔隷術師トオルとは。
「あいにくだが、人前で顔を隠すような客人と長い付き合いをできる自信はない」
「これは手厳しいですね……まあ、お見苦しい傷を顔にちょっと負っておりまして、ご勘弁を」
白々しいセリフだったが、そこを追及してものらりくらりとかわされそうだった。
クルスと名乗った銀仮面の喋り方は、どこかあの魔隷術師を連想させる雰囲気があって、セレスタを苛つかせた。
「それで、姫さまの行方について何を知っているというのだ、お前が？」
「ん～、正確には少し違いますね。姫を連れ去った魔隷術師について……ですよ」
「……なんだとッ⁉」
思わず身を乗り出したセレスタに、クルスはおどけたような仕草で両手を広げた。

「詳しくは明かせませんが、自分は奴に敵対する立場にいる者です。ほら、敵の敵は味方、って言うでしょ」
「それが本当だとして……事情を明かさずに、私を利用するつもりか？」
「いやいや、人聞きの悪い。私の援助をどう使うもあなたの自由ですよ、見返りも求めません」
しばし、無言で悩むセレスタ。
クルスは明らかに怪しいが、魔隷術師の手がかりが喉から手が出るほど欲しいのも確かだった。
「では貴殿はどんな助けを、私にくれるというのだ？」
「そうですね……たとえば」
唐突に、クルスの姿が目の前から消えた。
ぞくり……と女騎士の背中に戦慄が走る。
背後に回られている、と直感で気付き、反射的に体を動かそうとした瞬間……！
「あうッッ⁉」
バチッ、とうなじの下、首筋から火花が散ったような一瞬の痛み。
何かが地面にべちゃりと落ちる音。
「な、なんだ、これは……ッ⁉」
「ふむ、やはりあなたに憑いていたのですね」
どこかルメイン神の聖印にも似た、赤黒い円状の薄い塊が、死にかけたクモのようにピクピクとうごめいていた。

首筋に手をやると、そこにはかさぶたを無理矢理剥がしたような傷。
あんなものが……まさか自分の体にずっと貼り付いていたのか？
「キ、サ……マ……ナ、ゼ……ギギャッッ!?」
赤黒い何かをクルスの靴底が潰し、グリグリと踏みにじった。
その直前、まるでうめき声のような音がかすかに聞こえたが、気のせいだろうか？
「危ないところでした。魔隷術師の邪術ですよ、これは。あなたに取り憑いていたんです」
「な、なんだと!?」
そういえば、あの日からずっと続いていた頭の中の重苦しさが消え去っていた。
後遺症なのか、まだ当日の詳しい記憶は一部はっきりしないが……。
「か……かたじけない、クルス殿。く、このような汚らわしい術が私の体に……おのれッ！」
「これで少しは信用していただけますかね？　これからお話しする、奴の手がかりについても」
「あ、ああ。我らは共に、奴の敵だ。奴を討てるなら労苦は惜しまない、どこまでも征こう！」
謹慎が解けないなら、たとえ一人でも、たとえ騎士の栄誉を捨てようとも、地の果てまでもあの男を追う覚悟だった。
「よろしいでしょう、セレスタさん。ならば奴を討つための〝武器〟も、ご用意しようじゃありませんか」
銀の仮面が満足げに頷く。その中に隠された表情は、窺い知れない。
「待っていろよ、魔隷術師トオル！　その名、夢の中でまで片時も忘れたことはないッ……！」

ステータス

【魔隷術師トオル】……ジョブ：魔隷術師ＬＶ15

スキル：隷属魔法ＬＶ９／魔の契約ＬＶ１／魔隷強化ＬＶ５

現在の魔隷（残り枠：２人分）

【姫騎士キリカ】【女法術師ニーナ】【女戦士アメリア】【エルフの精霊弓士シエラ】

【アーマーゴーレムのナナ】【魔貴族パルミューラ】【女伯爵ユーリナ】

2話：主従の奉仕と、それぞれのルーツ

イヴリースが狙う謎の存在〝破天の骸〟の手がかりがあるという、シェイヨル大森林。

ランバディア王国の南西に広がるその広大な樹海は、この大陸でもっとも多くのエルフが住むという場所だ。

長命種族エルフは数千年の昔から、たびたび魔族との戦いにおいて人間たちと共闘した歴史があり、直接的な交流は薄いにせよおおむね良好な関係を築いている。

ほとんどのエルフは森と共に一生を過ごすが、シエラのように故郷を出て人に混じる者も、ここ数百年で少しずつ増えているらしい。

だが、だからといって大森林が安全な場所かというと、とんでもない。

点在するエルフの集落を除けば、道らしい道もない天然の迷路じみた地形が侵入者を阻み、樹海特有の多様なモンスター生態系も要注意。内部の危険度は平野部とは比較にならないそうだ。

シエラの先導があるとはいえ、サバイバル手段をはじめさまざまな備えがなくては命の保証はない場所。

その準備が整う間、俺たちが新たな拠点で何をするべきかといえば……。

※　※　※

「ううっ……こういうこと、そのうち絶対させるんじゃないかと思ってたけどぉ……っ！」

「ほ、本当にキリカとわたくしで一緒にこれを……す、するんですの？」
「当たり前じゃないか、プリンセスとその騎士の主従ダブル奉仕は男のロマンだよ」
伯爵領別邸、キングサイズの天蓋つきベッドに腰掛けた俺の股間に、ひざまずかせたキリカとシスティナ姫の顔を寄せさせる。
極上の美少女二人に突きつけたチンポは、もうはちきれそうなくらいにギンギンだ。
「ああっ、トオル様のとてもたくましいですわ……あの……わたくし、まだ経験が浅いので、キリカのを見ながらお勉強させていただこうかと……」
「え、ええっ⁉　そ、そんな姫さまに見られながらとか、恥ずかし……んぁ⁉　か、勝手に舌動かされっ……んうぅっ！」
隷属命令で、キリカの可愛い舌を下品なくらいに突き出させ、亀頭にねっちょり密着させる。
本人の意志に反して、ねろんねろんと赤黒い肉の上をイヤらしく踊り、唾液をたっぷりまぶしながらチンポを喜ばせていく姫騎士のベロ。
「す、すごいですわキリカ、そんなふうに舌を動かすんですのね……！」
「ふぁ、んぁっ……れりょ、れろろぉっ……ち、違うんです姫さまこれは、こいつが無理矢理ぃっ……んひゃ、んちゅじゅるるっっ！」
大きな胸をドキドキさせて、興味津々と姫騎士のおしゃぶり奉仕を見つめるシスティナ姫。
同性の友人に見られているという状況が、キリカを耳まで真っ赤に染めていく。
「さあ、姫も眺めてないで同じようにしてごらん」

「あ、はっはい……んちゅっ、れろぉぉ……っ！　んぁ、れろぉっ、ちゅぷっ、じゅぱっ……こ、こうでひょうかぁ……？」

見よう見まね、精一杯のイヤらしい動きで大胆に桃色の舌をうねり動かす第三王女。

まっすぐ天を突くチンポを中心に、左側のキリカと右側のシスティナ姫、二人の濡れた舌が対照的なダンスを踊る。

「なかなか上手だよ、姫も。今度はそれぞれ、互い違いにサオの部分を上から下までしゃぶりあげてごらん」

「ちゅ、注文が多いわよぉ……んっ、れろるるぅっ、れりょろぉぉぉぉっ……！」

「こ、こうれふかぁ……？　ちゅっ、にゅちゅぅぅっ、にゅろろぉぉぉっっ……！」

清楚な黒ストレートと軽くウェーブがかったプラチナブロンドが、チンポの両サイドを上下に行ったり来たりして、カリの段差や浮き出た血管を密着させた舌と唇でシゴく。

生まれも育った世界も違う、だが周囲のアイドル的存在でレアジョブということは共通する最上級の美少女二人。

この豪華すぎるダブル奉仕は、視覚的にもたまらない。

「ふぁ……キリカは、トオル様にこうやってご奉仕するの、ずいぶん慣れてるんでふのね……ちゅぶっ、んちゅむぅぅ……っ！」

「え、えっ⁉　わ、私はムリヤリ教え込まれただけで……んちゅ、んりゅりゅっ！　ひ、姫さまこそ、イヤじゃないんです、かぁ……？」

「わたくしは、トオル様に喜んでほしいですし……は、はしたないですけれど、好きな方のチンポ様にこうやってお仕えすることに、幸せを感じると気付かされたのですわぁ……ちゅぅぅぅっ！」
「え、あ、ううっ……そ、そんな私は、姫さまと違って幸せ、とかはっ……す、好きでもないですからっ、こんなモノ……じゅぶぷっ、んちゅるちゅっっ！」
隷属命令もあるとはいえ、キリカも姫の痴態に引きずられるように、だんだんと積極的に大胆に、可憐な唇を使いだす。
育ちのいいお嬢様二人が頬を染め、品のないおしゃぶり音を立てながらいつしか、俺のチンポを奪い合うように吸い付き舐めしゃぶるのだからたまらない。
「うっくっ、いいぞ二人ともっ……よしっ、次はそのでかい乳を寄せて、俺のを挟めっ！」
「なっ何それ、ちょっ……だから体を急にっ、んあぁっ⁉」
「ま、まあ……わたくしたちの、お胸で……こ、こうです、の？」
命令のままブラウス状のインナーと純白ドレスの胸元がぺろんとはだけられ、露出した四つの白く巨大な膨らみが、ガチ勃起したチンポめがけてギュッと寄せられ集まった。
「うお、こ、これは想像以上にたまらんものが……っ⁉」
巨大なマシュマロめいた柔らかな爆乳と、抜群の弾力を備えたハリのある巨乳。
どちらも捨てがたい豪華な柔乳カルテットが、まとめて四方から押し潰すように押し寄せるこの圧倒的ボリューム感！
「はっんあっ、んんうっ⁉　ひ、姫さまのと押し合うようになって、これっ……やだ、んあぁぁ

っ⁉」
「ああっ……キリカのお乳がわたくしのと密着してっ……な、なんだか変な感じですわ、でも心地よい柔らかさが、はぅぅっ！」
「よぉし、仲良くそのまま思いっきり寄せてろ……よっと！」
二人の唾液をローションにして、腰を浮かせて下から上に、ねちっこく突き上げるようなピストン運動を開始。
にゅっぽん、にゅぽん、たぽったぽっ……と、余す所なくみっちり乳肉に密着状態でズリ動くフル勃起チンポ。
「や、やぁっ⁉　す、すごくエッチな音してるよぉ、これぇっ……それにどんどん熱くなって、む、胸がぁっ……ふあぁ⁉」
「あ、はぅぅっ……あ、熱いです、わぁっ……！　お、お乳同士とチンポ様が、とろけてひとつになるようにっ……ひゃうぅぅんっ⁉」
「すごいぞっ、キリカっ、姫っ！　二人の乳マ〇コまとめ喰い、最高だっ……ううっ！」
窒息しそうな乳の海にとっぷり溺れたチンポが時折、四つのぷりぷり柔肉の十字状になった谷間から息継ぎするように真っ赤な先端を突き出す。
嬉しそうにピュピュッと漏れるカウパーが、敏感な乳を合わせてこね回し合う行為で桃色に上気した美少女二人の顔に飛び散った。
「か、硬いのがおっぱいの中ごりゅごりゅってぇ……」

「はふぅぅっ⁉　よ、寄せた先っぽに当たりますわぁっ、ガチガチのチンポ様がち、わたくしの乳首にぃっ……ひぁぁんっっ！」
とろけるような触感の支えによって柔らかな空間に浮く俺のチンポは、まるで無重力状態。
腰をどれだけ乱暴に動かしても、決してその天国の檻を出ることなく、沈み込むような気持ちよさだけが返ってくる。
これは止まらない、もう止められない、止められるわけがない。
「ああくそ、そろそろイキそうだっ！　すごい量が出そうだけどっ、どっちにブチまけるべきか迷うなぁっ！」
「え、な、何それっ……や、やめてよねっ、目の前で姫さまをそんなので汚さないでっ！　そ、そんなのするくらいなら、わ……私に出しなさいよっ！」
「あ、あのキリカ、わたくしは別に……っ、と、トオル様っ、わたくしの顔にチンポ様みるく、前みたいに浴びせかけてくださいませぇっ……！」
にゅっぱん！　にゅぷぷっ、にゅるっぽ、たぽんっっ！　というダブル巨乳ズリ音をＢＧＭに。
片方は姫のために身を挺して、もう片方は望んで、整った顔を爆発寸前の肉凶器の前にさらそうとする。
「そうかそうか、どっちも俺のチンポ汁がそんなに欲しいのかあ……なら大サービスだっ！」
「え、きゃっっ⁉」
「あっ、えっえっっ？」

左手を黒髪の、右手を金髪の……いい手触りの中に差し入れて真ん中にぐいっと寄せ、柔らかいほっぺた同士をぷにっと密着させる。
そして四大柔肉凶器の中を、猛スピードでコスりあげられたバキバキの先端がそこに狙いを定め……！
「仲良く俺のザーメン浴びろぉっ!!　キリカッ、システィナぁっ!!　くぅぅぅっっっ!!」
「ちょ、ちょっと待っっ……きゃぁぁぁあっっ!!?」
「えっ、あの、その、あっ……ふぁ、んぷぁぁぁぁんっっ!!?」
びゅるるっっ、びゅぱぁぁぁっっ!!　びゅくびゅくんっっ!!
どびゅるびゅっっ、びゅちゃちゅっっ、どぷぷぱっ、ねちゃぁぁっっ……!!
ダブルおっぱいに圧迫された肉チューブの先から躍り出た白濁スペルマが、姫と姫騎士の清楚可憐な顔面にものすごい勢いで襲いかかった。
頬や鼻筋、眉に額、耳まで、可愛いパーツをことごとく汚していくばかりか、黒のロングストレートと輝くプラチナブロンドにも降り掛かり、我が物顔に俺の遺伝子の匂いで染め上げる。
「はぁ、ぷぁ、ぷはっ……んううっ、ど、どれだけ射精すれば気が済むのよぉぉ……馬鹿ぁぁ！やだぁ……か、顔どろどろぉ……！」
「ふぁぁ、んふぁぁっ……！　す、すごいです、わっ……いつ浴びても、頭がしびれるみたいなこの匂いぃ……と、トオル様に征服されたという感じがしますの……っ！」
湯気を立てるほどねっちょりと美貌を汚され、形のいい眉をひそめながら、どこかぼうっとした

表情のキリカ。
はっ、はふっと短い呼吸を繰り返し、うっとりと俺の顔射マーキングに酔うシスティナ姫。
たまらなく征服欲、独占欲を満たされる眺めだ。
「え、ちょっ、姫さま、前にもこんなこと、されたんですかっ!?」
「え……？　愛する殿方のおザーメン様を顔面で受け止めるのは、淑女のたしなみではないんですの……っ？」
「な、な、ななっ……何教えてるのよ、この変態ぃぃっ!?」
余計なことをバラされる前に、口を塞ごうと思ったその時、部屋の扉がせっかちなノックと共に開いた。
入ってきたアメリアとシエラが、ねっとり白濁液を浴びた二人の様子に目を丸くする。
「あーっ！　ずるいぜ、二人だけでもう始めちゃってるじゃないか、混ぜてくれよ！」
「シエラも……参加、する……」
こうなったらもう酒池肉林の連戦、待ったなしだ。
ここ何日か朝から晩まで続く、魔隷たちを取っ替え引っ替えの夢のようなハーレムプレイは、まだまだ終わりそうになかった。

※　※　※

とはいえもちろん、Hしてばっかりが準備じゃない。
キリカと姫を手でイカせながら、シエラとアメリアを重ねて交互に突っ込む５Ｐをたっぷり楽し

んだ後。
俺はニーナのアーティファクト管理部屋に、アメリアを呼んだ。
「なんだマスター、あたしに渡すものって？」
「ああ、色気のないプレゼントで悪いが、ユーリナ伯爵邸に死蔵されてたやつを貰ってきた」
差し出したのは、普段彼女が使ってるものと同じくらいのサイズの長剣。まるでカッターナイフのように、幅広の刀身に無数の分割線のようなものが刻まれている。
「連鎖刃（れんさじん）……ビュートブレイドというらしい。刃部分の形状を変えることができる複合武器だ」
短いコマンドワードを唱えると、ジャラッとその刀身が無数に分割され、中心に通った鋼線で連結された鞭のような形状へと一瞬で変わった。
何かアニメとかゲームでたまにあるよな、こういう武器。
「おお、これは凄いなっ！　貰っちゃっていいのか、マスター？」
「もちろん。多少離れた間合いにも対応できた方が、盾役としても位置取りがしやすいと思ってね」
アメリアは目を輝かせ、嬉しそうにビュートブレイドの変形を繰り返す。
まるでプレゼントを貰った子供みたいな喜びようだ。
「さんきゅーマスター！　あ～、早く実戦で試したいぜ！　このウェイトバランスなら、鞭状態でもかなり深い傷を与えられそうだよなぁ……ふふふ……！」
それはいいんだが、なんだか目がアブない輝きを帯びてきた。今にも誰かに斬りかかりそうな勢いだ。

「あーそのぉ、アメリアはいい武器見るとバトルマニアモードのスイッチ入っちゃうとこがありまして……」
「そ、そうか……試し斬りは、外で丸太とか相手にやってくれよ？」
なんとなく、美人なわりに男が寄り付かなかった理由の一端がわかった気がした。
「そういやニーナ、エンチャントを頼んだアレはできたか？」
「あっはい、さっきちょうど！　試してみてください、ご主人様」
さっそく手渡された腕輪をはめ、こめられた強化魔法を起動する……と。
揺れるカーテン、ニーナのまばたき、外に走っていくアメリア、周囲のすべての動きが突然、超スローモーションへと変わる。
頭の中で数える、1秒、2秒……5秒まで数えた時点で、すべては唐突に元に戻った。
「10倍に引き延ばして体感できる限界は、俺の主観で5秒間、ってとこか」
「わたしの強化魔法による感覚加速だと、そのあたりが限界ですね。時空魔法ならもっといけるかもですが……」
さっきのはあくまで主観時間を引き延ばしただけで、俺が速く動けたりするわけじゃない。
状況認識や作戦を立てる時間を、できるだけ稼ぐための手段だ。
元々避けられるタイミングで飛んできた攻撃に反応するのにも役立つだろうけど、過信すべきじゃないな。
「一回で結構魔力のチャージを消費しますし、連続起動はできませんから気をつけてくださいね」

「ああ、とりあえずは十分だよ。よくやったニーナ」
「えへへ、頑張りましたよ」
このパーティの、ある意味最大の弱点、ボトルネック。
それは他でもない俺自身だ。
魔隷術師のレベルがいくらあがろうと耐久力は一般人とほぼ変わらず、重い防具も着けられない。
魔隷強化は俺自身を対象にすることはできないし、強化魔法（エンチャント）のフォローにも限界がある。
パーティの柱である俺が、直接戦闘では一番弱い……特にもし、俺が魔隷術師だと知られてしまえば攻撃は集中するだろう。
少しでも俺の生存能力をあげること。それがグルーム戦でも思い知った、これからの戦いにおける重要課題だった。
「時分割加速（インターアクセル）の腕輪……これなら少しは生存率をあげることができそうだ」
焼け石に水の防御力をヘタに稼ぐより、こっちの方がまだ信頼がおける。
まあ、魔隷たちを上手く活かして俺は安全圏にいるってのが、本当は一番なんだけどな……常にそうはいかないだろうからな、今後はなおさら。
「ところで、ニーナ。ちょっと前から気になってたんだが……なんで最近、その格好なんだ？」
彼女が着ているのはモノトーンの、フリルとリボンに彩られたあの可愛らしいメイド服。
そういや天啓の塔から何着か持ち出してたな。金髪セミロングの上にはちょこんとヘッドドレスも装着済みだ。

「え、似合ってませんか？」
「いや、むしろよく似合ってるが……なんでメイド服？」
「なら問題なしです。いやその、いまいちキャラ的なパンチに欠けるわたしとしては、新たな属性を獲得すべきかと思いまして……」
よくわからん理屈だが、ニーナなりになにやら思うところがあるらしい。
「というわけで、今後わたしはメイド法術師ニーナです！　元々ご主人様呼びですし、ちょうどいいのです！」
「お、おう……よくわからんが、頑張ってくれ」
それはいいんだけど、メイド服の上から術師のローブを羽織ってるところはツッコミ待ちなんだろうか……と思いつつ、俺は魔隷の新たな門出を祝福してやることにしたのだった。

※　※　※

その夜、遅く。
一日ヤリ疲れた汗を別邸一階の広い浴場で流した俺は、二階のベランダで涼しい夜風に当たっていた。
地球と違ってふたつ並んだ月を眺めていると、ガシャガシャと誰だか一発でわかる足音が近付いてくる。
「ナナか、どうした？」
「ウムム……ご主人、ナナハ最近、寂シイゾ！」

赤銅色をしたアーマーゴーレムの巨体が、大げさに嘆息するようなジェスチャーをとる。
「ゴ主人、皆ト遊ンデバカリデ、ナナニアマリ構ッテクレナイ」
「あー、それは悪いことしたな。じゃあここ座れよ、ちょっと月でも見ながら話をしよう」
「ウム、ゼヒ！」
ずずんっと重い腰を下ろしたナナと一緒に、しばし月見タイムだ。
ふと、そういえば聞いてなかった疑問を口にする。
「そういや、ナナはどういういきさつでニーナたちのパーティに加入したんだ？」
「アア、ソレハ……アノ三人ガ、眠ッテタナナヲ見ツケタンダ。……遺跡、デ」
「遺跡？　見つけた？」
てっきり、錬金術師とかに作られたのを買い取られるか何かしたんだと思ってたところに、意外な言葉が飛び出てきた。
「あいつらが探索してた遺跡に、ずっといたってことか？　いつから？」
「ソウ……ラシイ。ダガ、ウウム……ソレガ、ヨク判ランノダ、ゴ主人」
どうも、ナナにはそこで発見され目覚める前の記憶がないらしい。誰に、いつ作られたのかも。
行く所もないナナを、ニーナたちは軽いノリで仲間に引き入れたんだとか……いかにもやりそうではあるが。
「アールマV7、トイウ名ハ、ナナノ眠ッテイタ台座ニ刻マレテイタ唯一読メル文字ダッタ……ラシイ」

「なるほどね……気にはならないのか？　自分のルーツってやつが」
「マア、ワカラナイモノハ、仕方ナイ。ナナハ十分、皆ト楽シクヤッテイル」
頭のスリットの中に光るカメラアイで、双子の月を見上げるナナ。
なかなかユニークで面白い魔法生物だな、こいつ。
しかし、そうなるとひょっとしてずいぶん古い時代の産物なんだろうか……と、ナナの出自に思いを馳せた、その時。
「……主（あるじ）さま」
「オ、シエラ？」
今度は、クールなエルフがベランダにやってきた。
尖った耳が突き出る、ハチミツ色の髪の一部を三つ編みに垂らした特徴的な髪型。
薄い部屋着を、ゆさっと重そうなバストが押し上げている。
「これから行く、故郷の森のことで……主さまに、聞いておいてほしいことが……ある」
「聞いてほしいこと、だって？」
シエラの静かな声音は、かつてないほどに真剣だった。
「シエラが……森を出た、理由」

3話：シエラの過去と、森の異変

丸太を寄り合わせたような、巨大な樹木の拳が、ゴウッという風切り音をあげて上空から振り下ろされる。

間一髪横っ飛びでそれをかわすキリカとシエラ。黒とハチミツ色、二色の髪の毛の残像が左右になびく。

「くっ！　この巨体で暴れられると、反撃のチャンスが……！」

「ええい誰でもよい、10秒だけ時を稼げっ！」

木々の間に浮かび滞空したパルミューラが、掲げた両手に紫色の魔力を集め始める。

敵はツリーオーガ……ドクロ状の不気味な顔が幹に浮き出た、凶暴な樹木巨人。

奴は再び、森の柔らかい地面にめり込んだ拳を持ち上げようとするが……！

「チャンスだ、ナナ！」

後方から俺の指示が飛んだ直後、ツリーオーガの動きがガクッと止まった。

「ヌゥゥゥオォォォーッッ!!　押サエ込ンダゾ!!」

アーマーゴーレムが大木を抱きかかえるように、樹木巨人の腕をがっしり捕らえて離さない。

すかさずもう一方の腕が、こしゃくなとばかりに生きた全身鎧をはじき飛ばそうとするが……！

「頼んだぞ、アメリア！」

「任せろって！　さあ刻めっ、あたしのビュートブレイドっ！」
女戦士の手から連結鞭状に変形した刀身が伸び、その腕をからめとって拘束した。
しなやかな体にグッと力がこもり、締め上げたビュートブレイドを渾身のパワーで引っ張る。
と、バギバギッとものすごい音がして、ツリーオーガの片腕が根こそぎ斬り飛ばされた。
「ほう、やりおるわ女戦士、魔力も溜まった！　では姫騎士よ、あれを試すぞ！」
「え、ぶっつけ本番で⁉　仕方ないわね……わかったわ、タイミングは慎重に合わせて！」
「ふん、誰に言っておる！」
キリカが煌剣アルカンシェルを振りかざし、天翔輝円（サークル・エアリアル）を足場に跳躍する。
両腕が使えない樹木巨人は、だが青々と葉の茂るその頭部から、蛇のようにうねる無数のツタを迎撃に放った。
しかしその瞬間、薄緑色をした風の魔力をまとって飛来した無数の矢が、見事にツタを次々と射抜いてゆく。
「邪魔は……させない……」
「ナイスだ、シエラ！」
すべての攻撃部位を的確に封じられ、落下してくるキリカを迎撃できないツリーオーガ。
太い幹の上側に、半透明の刀身が深々と突き立った。
「今よ、パルミューラッ！」
「くふふ、承知じゃ！　死を抱いて飛べよ裁きの魔光……裂破魔散弾（ディヴィジョン・ショットブレット）ッッ‼」

煌剣を手から離し、キリカが後方に跳躍退避したその直後。
漆黒のゴスロリドレスが余波で後ろになびくほどの、強烈な紫色の魔力が放たれた。
その狙いは、樹木巨人……ではなく、その幹に刺さったままのアルカンシェルの刀身。
「疑似次元断層たる煌剣の刃は、あらゆる存在を切り裂き両断する……魔力もまた然り。さあ千切れてはじけよ、我が魔弾ッ!!」
落雷のような轟音がとどろき、ツリーオーガの上半身が黒い爆発と共にまっぷたつに裂けた。
パルミューラの飛ばした爆発性の魔力が、煌剣の刀身に触れて切り裂かれ、急激に連鎖爆発したのだ。
しかも刺さった部分から、幹の内部めがけて……爆裂弾を体内に打ち込まれたようなものだろう。
「オオッ、ヤッタゾ!」
姫騎士の聖騎剣技と魔貴族の魔界魔法、本来ありえないコンビネーションの直撃に、それこそ倒木みたいにゆっくりと崩れ落ちる樹木巨人。
魔隷強化による底上げがあるとはいえ、熟練のエルフ戦士団でも手を焼くという大型モンスターを無傷で倒してしまうんだから、このパーティも強くなったもんだ。
「よくやった、みんな。後方に退避したニーナと姫を、呼び戻してきてくれ」
「わかったぜマスター。あー、思ったよりあっけなかったな、もっと斬りたかったなぁ……」
「ふん、どうせ大森林の奥に進むにつれ、もっとやっかいな連中が出てくるわい」
煌剣の回収など、戦闘後の処理に移るみんなから、一人だけ離れている人影に俺は気付いた。

弓を背中に背負い直し、無言でたたずむシエラ。
「……」
クールな瞳が、いよいよ深さを増す大森林の奥を静かに見つめている。
その横顔を眺めながら俺は、あの夜に彼女から聞いた話を思い出していた。

※　※　※

「シエラには……大切な姉さまが、いる……」
別邸の寝室。俺に後ろから抱きかかえられた、真っ白な細い体の温度が心地いい。
なんとなく裸で肌を合わせながら、俺はシエラの話を聞いていた。
「へえ？　それは初耳だな」
「血は、繋がってないけど……シエラはエルフで、姉さまは……ダークエルフ」
ダークエルフ。
別に邪悪なエルフとかじゃなく、暗所に適応した体を持つことからそう呼ばれる、褐色肌の種族のことだ。
エルフたちの崇める森と自然の女神アシュグィンの姉妹神、死と再生の女神ティプトーリを信仰し、洞窟や地下に集落を築いているという。
「シエラと姉さまは……本当の姉妹みたいに育った……」
古来から友好と文化交流の一環として、シエラの部族と〝姉さま〟の部族には、常に何人かの子供を互いの部族に預けて幼少期を過ごさせるという風習があった。

そうしてやってきた〝姉さま〟と、シエラは共に仲良く育ったそうだ。
「でも……」
二人が成長した頃、〝姉さま〟の母親が病気で急死したのが転機だった。
彼女はダークエルフ部族の祭事を司る、巫女の血筋だったらしい。
先代が死ねば、新たな巫女として、部族の集落に戻らなくてはいけなかった。
「突然の別れ、ってわけか。寂しかったか？」
「うん……でも、仕方ない……姉さまは、いつかそんな日が来るって覚悟してたから……
……でも」
シエラには、ひとつの心配事があった。
ダークエルフの巫女の血筋は代々、特殊な力と引き替えに、短命の呪いと言うべきものを背負っているらしい。
〝姉さま〟の母も、祖母も……エルフの基準からすると驚くほど短くしか生きられなかったそうだ。
つまり、その彼女もまた。
「だから……シエラは、その呪いを解く方法を……なんとか見つけたいと思った」
エルフの古老たちは、そんなものは聞いたことがない、諦めろと口を揃えた。
だがシエラは諦めきれなかった。それでは〝姉さま〟が、あまりにもかわいそうだと思ったのだ。
「なるほどね。だから森を出て冒険者になって、その手段を探すことにしたのか」
こくりと頷くシエラ。

ニーナたちパーティ仲間はそれを知って、他の依頼を遂行しながらも手がかり探しに協力してくれてたとのことだ。
「でも、まだなんの成果もあげられてない……だから、森に帰るのが……少し、憂鬱」
たっぷり重そうな胸の前で、細い手がシーツをギュッと握りしめる。
後ろからだと顔は見えないが、きっと無力な自分を責めるような表情を浮かべてるに違いない。
「それでシェイヨル大森林に行く話をした時から、少し様子が変だったのか……っと」
「……ひゃ、ひゃうっ⁉　あ、主さまっ……⁉」
驚き、いきなり跳ね上がるシエラの声。
柔らかそうな蜂蜜色の髪から伸びた長い耳を、かぷっと甘噛みしてやったのだ。
「責任感が強いのはシエラの長所だが、背負い込みすぎるのは短所だぞ？」
「あ、あう……ひゃう、む、胸もっ……⁉」
さらにエルフと思えないほどボリューミィなおっぱいに手をやって、やわやわと揉み始める。
種族特有の吸い付くような手触り、これも姫やキリカとまた趣の違ったオンリーワンのいいおっぱいだ。
「焦るほど時間がないわけじゃないんだろ？　これからゆっくり探し続ければいいんだよ」
「そ、そうかもしれない、けど……んあっ、あっ主さま……っ！」
「どうせ〝破天の骸〟の手がかりを探し回るんだ、一緒にそっちも探せばいいさ。それにシスティナ姫が、ひょっとしたら予言で解決してくれるかもしれないぜ？」

さすがにそれは都合のいい楽観論だが、俺がこう言えば気が楽になるだろう。
個人的な理由を抱え込むこと自体に、たぶんシエラはストレスを感じてただろうしな。
「あ……ありがとう、主さま……」
「気にするなよ。魔隷の事情を把握しとくのも、主人の役目だしな」
シエラは俺のものだ。クールな顔はいいが、落ち込んで暗くなられるのは困る。
せっかくの美少女魔隷たちには、常に最高の状態でいてもらわないともったいないからな。
「ああ、それにシエラの〝姉さま〟も、きっと美人とみた。早死になんかもったいない、〝妹〟ともども俺のものにしたくなったよ」
「もう……主さまの、エッチ……」
俺が正直な本音を口にすると、シエラは耳を赤く染めて顔を伏せた。
あとダークエルフの巫女って、レアジョブかもしれないしな。
「何を今さら。でも、もちろん今はシエラの方に興味があるけどな」
あぐらをかいた腰の上に、背中から抱えたシエラを座らせるようにして、敏感な耳と胸への愛撫ですっかり濡れたエルフマ〇コをチンポにあてがう。
にゅぶぶぶっっ……と、心地よい抵抗が軽い体重と共に俺を包んでいく。
「ひゃ、ひにゃあああっ……あぁっっ⁉　んぁっっ!!?」
種族がら人間よりキツいサイズの柔穴を、真下から思いっきり俺に貫かれ、シエラが普段とはまるで違う嬌声を響かせる。

クールなエルフ娘がこんなにも大きく可愛い声をあげるなんて知ってる男は、世界中で俺だけだ。
「く、この体位だと狭いキツキツな中に余計奥までにゅっぽり刺さって……！」
「んあぁ……あるじさまのっ、太いのがっ……シエラの中心を、貫いてるぅ……っっ‼」
むにゅむにゅと指が沈み込み、面白いように形を変えるエルフ巨乳を思う存分揉みしだきながらの座位バック。
ベッドをギシギシ揺らして腰を使い、リズミカルに細い体を突き上げてやる。
「余計な心配なんかするなよ、シエラ。心細くなったら、いつでもこうやって安心させてやるからなっ！」
「うん、うんっ……気持ち、いいのぉっ！　主さまにっ、ぎゅってされてると安心するっ……
……ひゃんんあぁっっ‼」
いい匂いのする長い耳を甘噛みしつつ、ゆっさゆっさと跳ねる柔らかな双乳を掴んで支点にし、軽い体を上下に揺さぶる。
ベッドの弾力を利用した真下方向からのピストンは、毎回少しずつ違った場所をえぐり、押し貫き、シエラの体を淫らな楽器に変えていく。
「そうだそれでいい、たまにはちゃんと発散しろ、こうやって気持ちよくなってなっ！」
「んひゃうぅっ⁉　なるっ、なってるぅ……っ！　主さまに、シエラ素直にさせられてるのぉ……ひぎっ、ひゃんぅぅぁあ⁉」

キュッキュと嬉しそうに締め付けを返すエルフ狭(せま)マ○コが、声のトーンの違い以上にシエラの喜びを素直に伝えてきた。
「くっ、まだ締まりが強く……っ！　イクぞっ、このまま注ぎ込むぞ、シエラ！」
「来てっ……主さまの熱いのぉっ、シエラにいっぱいいっぱい注いでっ……ひうっ、ひんんぅぅあ!!?」
ごちゅんっっ!!　と、ちっちゃな子宮を下から胸まで押し上げるような錯覚。
輝く髪を振り乱してのけぞったシエラの、胸以外スレンダーな体の最奥に、俺はすべての欲望を激しく解き放った。
「あああっあるじっさまっ……んふぁあああっっっ!!?　あぁぁぁ――――っっっ!!」
どびゅぶ、どびゅるるっっ!!　どくくっ、どくんどきゅんっっ!!　びゅぐんっっ!!
「ううぉっ……うっっ！　せ、狭いだけじゃなく絞り上げ方がすごいなっ、やっぱシエラのマ○コはっ……！」
魅力的な異種族のメスにひとしきり気持ちよく白濁液を注ぎ尽くす、オスとして最高の瞬間の後。
シエラを抱えたまま、後ろに積まれた枕にばふっと倒れ込む。
「ありがとう……主さま。少し、元気……でた」
「そうか……それはよかった、じゃあ二回戦だ」
「あう……い、いいよ……主さまが、したいなら……」
繋がったまま心地よい体重を感じつつ、前髪の横から垂れた、三つ編み状の髪をつまんで撫でさ

すり。
俺は少しだけ重圧から解放されたような顔でかすかに微笑むシエラの耳に、そっとキスをした。
※　※　※
「この先……もうすぐ、集落に着く……」
「あ～、やっとですね。さすがに一休みしたいとこでしたよ、姫さまも大丈夫でしたか？」
「ええ、わたくし皆さんの足手まといになってないか心配で……」
笑顔を交わすメイド姿のニーナと姫の組み合わせが、妙にさまになっている。
あれから色んな危険を乗り越え、俺たちはシエラの案内によってようやくエルフの里に近付きつつあった。
「……待って、みんな！」
と、シエラが耳をぴくりと震わせ、俺たちの前進を手で制した。
その直後、目の前の地面にどこからともなく飛来した矢が突き立った！
「うおっ、なんだなんだまた敵かよっ⁉」
「違う……この矢じりは……ダークエルフのもの」
その言葉に応えるように、ざざっ……と葉擦れの音が複数、深い森に響いた。
周囲の茂みや木の上から、褐色肌を軽装に包んだ何人ものダークエルフたちが姿を現す。
だがその手元では例外なく、ぎらつく矢がつがえられ俺たちに狙いを定めている。
「おい、なにやら様子がおかしいのではないか？」

「確かに、この殺気……ねえシエラ、ダークエルフはエルフの同胞じゃなかったの？」
「こんなはずは……聞いて！　我が名はシエラ、この先の故郷に友達を連れていきたいだけ……なぜ邪魔をするの？」
そう問うシエラの声も、明らかに動揺している。
一人のダークエルフが、殺気のこもった返事を投げ返した。
「森を出たエルフか……ふん、何も知らんようだな。今やエルフどもは、我々ダークエルフの敵となったのだッ！」

ステータス

【女戦士アメリア】……（レベルＵＰ！）※別行動時の成長も合算
ジョブ：戦士ＬＶ７→８
スキル：剣技ＬＶ３→４／盾技ＬＶ４／料理ＬＶ１
特殊装備：連鎖刃ビュートブレイド（ＮＥＷ！）

【精霊弓士シエラ】……（レベルＵＰ！）※別行動時の成長も合算
ジョブ：精霊弓士ＬＶ６→８
スキル：弓技ＬＶ２→３／精霊魔法ＬＶ２／隠密行動ＬＶ２→３

ステータス

【魔法生物アールマヴフ】……（レベルＵＰ！）※別行動時の成長も合算

ジョブ：アーマーゴーレムＬＶ６→８

スキル：格闘ＬＶ３→４／頑強ＬＶ２→３／自己修復ＬＶ１

【魔貴族パルミューラ】……（トオルの成長により、本来の力を一部取り戻した）

ジョブ：魔貴族ＬＶ８→11

スキル：魔界魔法ＬＶ６→９／魔法抵抗ＬＶ２

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売)／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

http://ktcom.jp/